

V 結 語

本書でこれまで述べてきたことを要約し、残されたいくつかの課題に触れ結語としたい。

まず、西隆寺伽藍をとりあげ、次いで西隆寺以前の平城京条坊、平城京以前の遺構の順に記述する。

西隆寺伽藍 西隆寺伽藍中枢部については1971年以來の発掘調査で金堂とそれを囲む回廊、北東に食堂、南東に離れて塔、寺域の東面の大路に開く東門が検出されている。

今回の調査地では、金堂と北面回廊、そして、中門・南門推定地を調査し、伽藍中枢部に関して新たな知見を加えることができた。

まず、金堂に関しては、金堂前面の瓦敷と灯籠跡の検出があげられる。瓦敷はこれまでも金堂の東面などで部分的に見つかったもので、今回の検出により、金堂の南全面および東側に広く瓦敷がめぐっていたことが知られた。灯籠に関しては、金堂との位置関係について、若干の問題を提起している。すなわち、灯籠の位置が従来推定してきた金堂中軸線よりも、天平尺で1~1.2尺東にずれる点である。他の古代寺院の遺構では、左右対称の伽藍配置をもつ寺院の場合、灯籠が伽藍中軸線と一致するのが通例であり、本例は稀な例外となるのか問題となる。また、灯籠の位置は、金堂とともに回廊の東西中軸線との関係でも注目されるが、回廊の東西規模が未確定であるので、施工誤差、施工の時期差などの問題も含めて、西面回廊の調査の進展を待って検討することにした。

北面回廊については、北東入隅から7間目の柱の予想位置に合致する礎石の据付け跡を確認した。北面回廊柱間が桁行10尺、梁間各8尺の規模でこの位置まで連続していることが確認された。これにより、講堂が北面回廊中央に取付く可能性は最終的に無くなったことになる。やはり、講堂は北面回廊の北方に位置するとみてよいであろう。

中門と南門については、後世の削平が著しく、遺構は残っておらず、推定地の近く検出された瓦あるいは、凝灰岩片などを廃棄した土坑の存在によっておよその位置を推定するにとどまった。

西隆寺伽藍に関しては、以上のような調査成果を加えた復元図を示した (fig.25)。基本的には『報告書1993』を踏襲しているが、今回の伽藍復元図では北面回廊がそのまま伸びる形とし、新たに金堂前に灯籠の位置を示した。

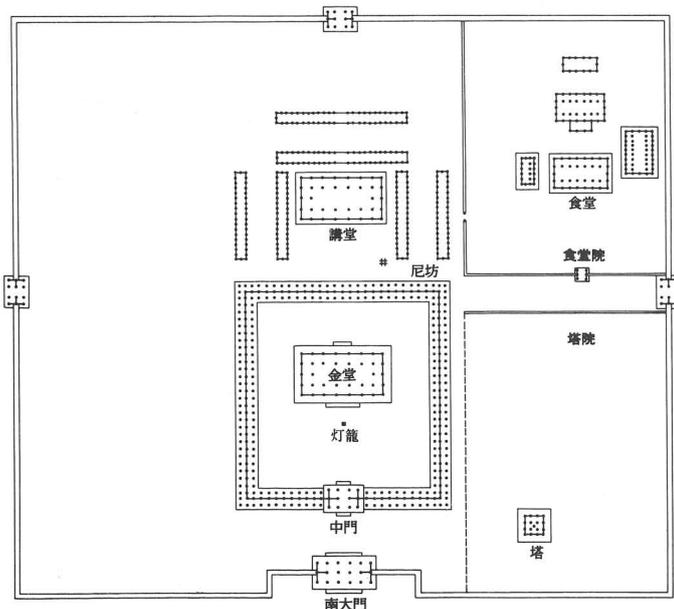


fig.25 西隆寺伽藍図 1:3000

報告書1993』を踏襲しているが、今回の伽藍復元図では北面回廊がそのまま伸びる形とし、新たに金堂前に灯籠の位置を示した。

なお、中門、南門（南大門）については位置、規模とも従来の推定復原のままである。

出土遺物のうち、西隆寺に関わるものとしては、多量の屋瓦の他に、経軸頭金具、石製六角小塔が注目される。六角小塔は正倉院の三彩小塔と同形同大のものである。

なお、遺物の上で、西隆寺の廃絶時期を明確に示すものは無かったことも付記しておこう。

西隆寺造営以前の平城京条坊 今回の調査地は西隆寺造営以前には、平城京右京一条二坊十・十五坪にあたる。条坊に関しても新たな知見を得た。

十坪の北西部で、北面回廊の下層に検出した東西道路は、一条条間北小路とみなした。問題は、その位置であり、従来の復元条坊に照らすと、かなり北寄りになる。この東延長上に過去の調査で検出されていた2条の東西溝ではさまれた空間については、坪内の道路と解釈されてきたが、今回はこれも条坊道路とみた。南の十四坪で検出されている東西道路が復元条坊よりもかなり北に寄っていることと考え合わせると、一条条間北小路およびその南の一条条間路は全体として北寄りに施工されていることとなり、これが、この地における条坊施工の実態とみなさざるを得ない。ただし、周囲の条坊遺構の調査例が少ないため、他の条坊街区との距離、方位などの関係を整合的に解釈できるまでには至っていない。

上記の一条条間北小路の位置は西隆寺伽藍の設計計画に関わる点でも重要である。この道路と北面回廊は軸線を共通にしており、北面回廊の設計にあたってこの道路が基準にされたことが推定できる。さらに、西隆寺東門の位置も北面回廊の軸線の東延長上にあるので、同一の基準によったとみてよいであろう。西隆寺東門の位置が従来の復元条坊街区に対して大きく北にずれている理由についてはこれまで不明であったが、これで解決をみたことになる。

十坪に関しては、北を限る一条条間北小路の検出により、区画の規模は1町と確定した。今回調査した十坪北西部に関しては、塵芥処理用と思われる土坑の他には建物などの顕著な遺構は存在しないことも、区画の隅の様相としてふさわしい。十坪では、これまでの調査で、南寄りに大型の掘立柱建物の他、井戸数基と小規模な掘立柱建物が検出されている。『報告書1993』刊行以後の調査でも、十坪の西寄りに、井戸や塵芥処理用とみられる大きな土坑が検出されていることも付け加えておこう(第212-14次調査S K 01、『概報1993』)。特にこの土坑では奈良時代半ばまでにおさまる多量の土器とともに、鉄釘、鋸、鉄鏝、砥石などを伴っていた。今回報告した西二坊坊間西小路東側溝出土の銀製帯先金具と共に十坪の性格を探る上で注目すべき遺物である。

これに対して、十五坪では井戸と南北方向の塀、少数の土坑を除けば、まとまりの不明な小穴が多数あるのが特徴であり、中心的な位置を占める建物の存在は明らかでない。一方、出土遺物の様相は注目をひく。坪内には炭化物を多量に含んだ土坑があり、坪の東を限る西二坊坊間西小路西側溝、特にその南寄り部分に顕著であるが、これらの遺構から鞆羽口、砥石などの铸造関係遺物が集中して出土している。西側溝の遺物は本来十五坪から廃棄された遺物と推定できるから、十五坪でも南寄り部分には、金属製品の製作にかかわる工房などが存在していたことを示唆している。

平城京以前の遺構 平城京以前の遺構としては、大型の掘立柱建物が検出されたことも特筆される。柱掘形に残された断面長方形の角柱は、藤原宮下層(S B 3650、『飛鳥藤原宮発掘調査概報15』)に類例がある。西隆寺周辺の調査では、これまで、この建物と同様、北で西に大きく振れる方位をもつ掘立柱建物、竪穴住居、溝などの遺構が検出されている。今回の調査では、直接遺構とは関連しないが、弥生土器や古墳時代の土器(布留式の土師器、6世紀後半の須恵器)や埴輪(4世紀末前後)などが少量出土しており、それらのいずれかの時期に対応する可能性がある。